

昭和前期の埼玉県内高等女学校生徒と保育の関わりに 関する一考察

A Study on the Relationship between Girls' High School Girls in Saitama Prefecture and Childcare
in the Early Showa Period

平井 厚志
(こども学科 特任准教授)

要旨 昭和前期、埼玉県内には23校の高等女学校が存在していた。県立の高等女学校として開校した学校は極めて少なく、市町村立あるいは組合立の実科高等女学校として開校し、やがて高等女学校へ昇格したり県立へ移管していった。23校のうち、21校が現存している。昭和の不況や満州事変から日華事変、太平洋戦争と進む中で戦時体制が強化され、高等女学校の生徒には、農作業や農繁期保育所での勤労奉仕、工場や学校内工場への勤労働員が行われた。本稿では、23校が保育にどのように関わったかを、各学校の要覧、周年記念誌、聞き取り調査を行った結果、幾つかの学校が農繁期託児所において勤労奉仕を行っていることが分かった。また、昭和18年(1943)に閣議決定された学徒戦時動員体制確立要綱に基づいて、幼稚園や保育所を附設した高等女学校が3校あることが分かった。中でも久喜高等女学校の保育所運営に関する取り組みや生徒が家政科の授業を受ける「家政週間」というカリキュラムは、戦後70年で初見である。本研究を通して、埼玉県の高等女学校が行った家事や育児の授業の様子、農繁期託児所での勤労奉仕や高等女学校付設保育所の実態が明らかになった。

【キーワード：高等女学校 農繁期託児所 高等女学校付設保育所】

I. はじめに

昭和前期は、昭和2年(1927)に金融恐慌が始まり、昭和5年(1930)から6年(1931)にそのピークを迎えた。不況は生活を直撃し、人々は非常に苦しい生活を強いられた。この不況は昭和6年(1931)9月に勃発した満州事変の軍需景気で収束した。戦争の状況を見ると満州事変以降、中国との戦いは続き、さらに昭和12年(1937)7月の日華事変(日中戦争)を発端として、昭和16年(1941)12月には太平洋戦争が始まり、昭和20年(1945)8月に日本の敗戦により戦争が終結するまで戦いは続いた。このような時代背景に基づき、戦時体制が強化されていったが、学校教育も大きく影響を受けた。

昭和初期の女子中等教育学校には、高等女学校と実科高等女学校の2つが存在したが、ここに学ぶ女子生徒は勤労奉仕や勤労働員として、農作業や軍需工場での労働に従事した¹⁾。軍需工場や学校工場での勤労の様子は多く報告されているが、国策として行った農繁期託児所の勤労奉仕や昭和18年(1943)6月に閣議決定された「学徒戦時動員体制確立要綱」²⁾に基づいて、高等女学校に設置さ

れた幼稚園や保育所の実態や生徒が保育等に従事した記録は極めて少なく、湯川³⁾が大阪府立泉尾高等女学校及び埼玉県立浦和第一高等女学校の例を述べている程度である。今回、昭和初期(1927～1945)に埼玉県内に存在した高等女学校23校について、各高等学校の令和元年度学校要覧、創立100周年や70周年等の記念誌を基に、昭和初期に高等女学校が保育にどのように関わったかを明らかにすることを研究目的とした。

II. 高等女学校

1. 我が国の高等女学校

高等女学校は戦前の女子中等教育機関であり、明治15年(1882)東京女子師範学校に附属高等女学校を設置したのが、「高等女学校」の初見である。学校制度に関する規定で高等女学校の名称が登場するのは、明治24年(1891)12月の中学校令改正時、女子中等教育規程に、「高等女学校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ施ス所ニシテ尋常中学校ノ種類トス 高等女学校ハ女子ニ須要ナル技芸専修科ヲ設クルコトヲ得」との条項を定めた時である。その後、明治32年(1899)2月に、従来

の高等女学校規程を改めて、新たに「高等女学校令」を公布した。高等女学校令制定について樺山文相は、地方視学官会議において、高等女学校は「賢母良妻タラシムルノ素養ヲ為スニ在リ、故ニ優美高尚ノ氣風、温良貞淑ノ資性ヲ涵養スルト俱ニ中人以上ノ生活ニ必須ナル學術技芸ヲ知得セシメントトヲ要ス。」⁴⁾と説明した。これは、その後の「良妻賢母主義」の教育につながっていく。さらに、明治43年(1919)の高等女学校令の改正で、「高等女学校ニ於テハ主トシテ家政ニ関スル学科目ヲ修メトスル者ノ為ニ実科ヲ置キ又ハ実科ノミヲ置クコトヲ得 実科ノミヲ置ク高等女学校ノ名称ニハ実科ノ文字ヲ冠スヘシ」と定めた。これによって実科高等女学校が成立した。

この高等女学校と実科高等女学校の2本立ては、昭和18年(1943)の中等学校令の制定により、実科高等女学校という名が消滅し高等女学校に一本化されるまで続いた。

2. 埼玉県的高等女学校

1) 概要

埼玉県内の高等女学校は、明治32年(1899)公布の高等女学校令第二条「北海道及府県ニ於テハ高等女学校ヲ設置スヘシ」に基づいて、明治33年(1900)4月1日、県立の埼玉県高等女学校が開校した。明治31年(1898)に埼玉私立教育会が開校した「埼玉女学校」を引き継ぐ形での開校で、本科と洋裁専修科の2課程を有する県内唯一の高等女学校であり⁵⁾、翌年には、埼玉県女子師範学校と併置され、埼玉県立浦和高等女学校と改称された。さらに埼玉県立浦和第一高等女学校と名前が変わり終戦を迎えた。戦後は、昭和23年(1948)の新制高校の発足に伴い、埼玉県立浦和第一高等学校と改称され、現在に至っている。浦和高等女学校に次いで設立されたのは、明治39年(1906)開校の川越町立川越高等女学校である。川越女子高等女学校は、明治44年(1911)に県立に移管している。同年には、県立高等女学校として熊谷女子高等女学校が開校している。その後の県立高等女学校の新設は、昭和9年(1934)の浦和第二高等女学校までない。熊谷高等女学校が開校し、また川越高等女学校が県立に移管した明治44年(1911)には、粕壁町立粕壁実科高等女学校が開校している。実科高等女学校は、明治43年(1910)

の改正高等女学校令で主に家政(家庭科)に関する学科目を修める者のために実科を設置し、または実科のみを置く高等女学校を「実科高等女学校」と称するとしてできた高等女学校である。実科高等女学校の創設は、従来の高等女学校の多くが都市部にあり、地方の女子は教育を受ける機会に恵まれなかったことの解消や、地方に適した人材の育成が目的であった。実科高等女学校の科目は、高等女学校に比べ「理科及び家事」「裁縫」「実業」の時間が圧倒的に多く、文部大臣訓示に見られる「家庭ノ主婦トシテ緊切ナル素養」⁶⁾を目的とした良妻賢母の育成の側面があった。

2) 高等女学校の沿革

埼玉県の高等女学校の沿革を、現存する高等学校の令和元年度版「学校要覧」から作成した。現存しない2校については、所在地の市史から作成した。太平洋戦争終結時において、高等女学校は23校が存在していたが、その後、昭和23年の新制高等学校発足や男女共学、校名変更等の幾多の変遷はあるものの、21の高校が現存している。さらに6校が女子校として存在し、県内各地区の拠点校として女子教育を担っている。

表1は、高等女学校が現在のどの高校に繋がっているかを示したものである。

表1 旧制高等女学校と現在の高等学校名

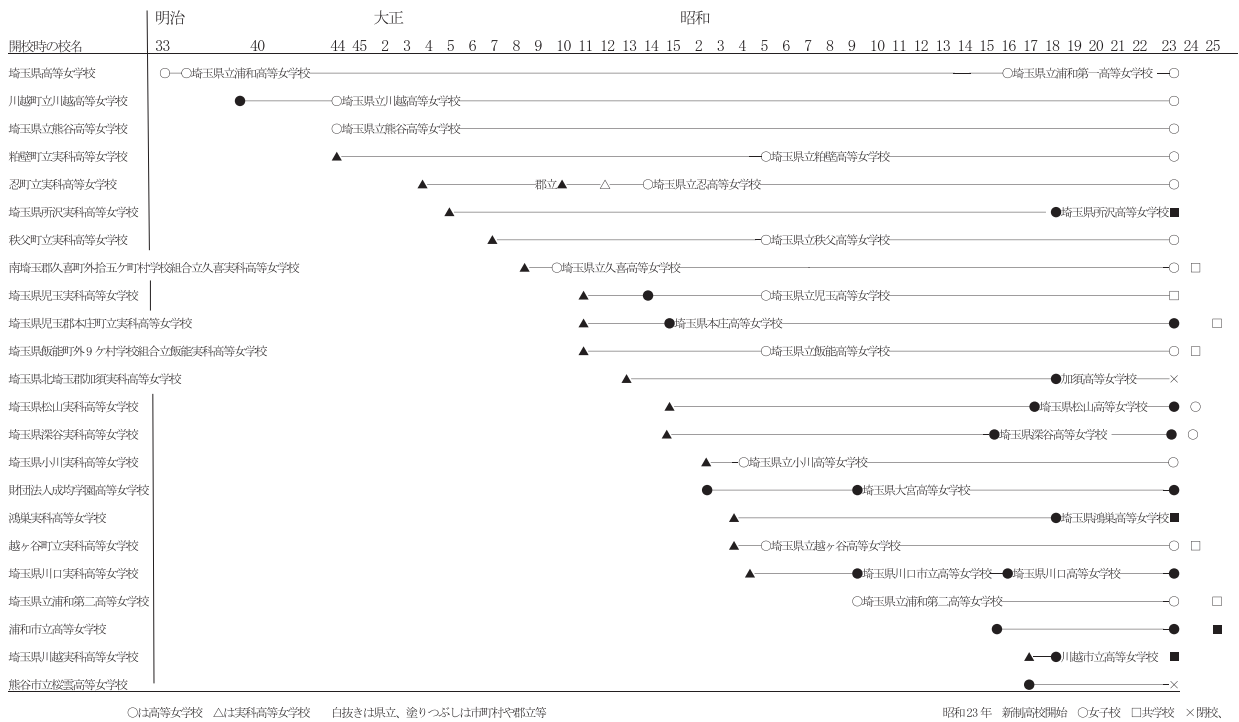
| | 開校時の校名 | 現在の高等学校名 |
|----|----------------------------|----------------|
| 1 | 埼玉県高等女学校 | 埼玉県立浦和第一女子高等学校 |
| 2 | 川越町立川越高等女学校 | 埼玉県立川越女子高等学校 |
| 3 | 埼玉県立熊谷高等女学校 | 埼玉県立熊谷女子高等学校 |
| 4 | 粕壁町立実科高等女学校 | 埼玉県立春日部女子高等学校 |
| 5 | 忍町立実科高等女学校 | 埼玉県立能登川高等学校 |
| 6 | 埼玉県所沢実科高等女学校 | 埼玉県立所沢高等学校 |
| 7 | 秩父町立実科高等女学校 | 埼玉県立秩父高等学校 |
| 8 | 南埼玉郡久喜町外宿五ヶ村学校組合立久喜実科高等女学校 | 埼玉県立久喜高等学校 |
| 9 | 埼玉県児玉実科高等女学校 | 埼玉県立児玉高等学校 |
| 10 | 埼玉県児玉郡本庄町立実科高等女学校 | 埼玉県立本庄高等学校 |
| 11 | 埼玉県飯能町外9ヶ村学校組合立飯能実科高等女学校 | 埼玉県立飯能高等学校 |
| 12 | 埼玉県北埼玉郡加須実科高等女学校 | 閉校 |
| 13 | 埼玉県松山実科高等女学校 | 埼玉県立松山女子高等学校 |
| 14 | 埼玉県深谷実科高等女学校 | 埼玉県立深谷第一高等学校 |
| 15 | 埼玉県小川実科高等女学校 | 埼玉県立小川高等学校 |
| 16 | 財団法人成均学園高等女学校 | 埼玉県立大宮高等学校 |
| 17 | 鴻巣実科高等女学校 | 埼玉県立鴻巣女子高等学校 |
| 18 | 越ヶ谷町立実科高等女学校 | 埼玉県立越ヶ谷高等学校 |
| 19 | 埼玉県川口実科高等女学校 | 川口市立高等学校 |
| 20 | 埼玉県立浦和第二高等女学校 | 埼玉県立浦和高等学校 |
| 21 | 浦和市長立高等女学校 | さいたま市立浦和高等学校 |
| 22 | 埼玉県川越実科高等女学校 | 川越市立川越高等学校 |
| 23 | 熊谷市立飯雲高等女学校 | 閉校 |

次に、各高等女学校の開校から昭和20(1945)の終戦時、更に新制高等学校発足に至るまでの設置者や校名等の沿革を見てみる。結果は表2に示すとおりである。

表2から23校の高等女学校の歴史を見ると、圧

昭和前期の埼玉県内高等女学校生徒と保育の関わりに関する一考察

表2 埼玉県内の高等女学校の沿革



倒的に開校時は実科高等女学校であったことがわかる。実科高等女学校は、創立しやすいように小学校に附設しての開校や、地方の実情に応じて開校を認めた経緯があり、埼玉県ではほぼ満遍なく地方都市に開校している。各市町村は、高等女学校を開校したかったがとりあえず実科高等女学校で開校し、その後、高等女学校への昇格を目指したり、県立への移管を希望したものが多く、その運動はやがて県議会や県当局を動かし、昭和5年（1930）には5校同時に市町村立の実科高等女学校が県立の高等女学校に昇格している。⁷⁾

表3は太平洋戦争終戦前に存在した23校の開校時の校種、実科女学校から高等女学校への変更した学校数を示したものである。なお、昭和18年（1943）の中等学校令発布で、実科高等女学校は終焉を迎え、その後の女子中等教育は高等女学校に一本化された。

表3 高等女学校・実科女学校の設立及び昇格

| 開校時の形態 | 学校数 | 昭和18年3月まで | 昭和18年4月以降 |
|--------------|-----|-----------|-----------|
| 高等女学校として開校 | 8校 | 6校 | 2校 |
| 実科高等女学校として開校 | 15校 | | |
| 高等女学校に昇格 | | 12校 | |
| 高等女学校に変換 | | | 3校 |

* 昭和18年中等学校令制定で、実科高等女学校は高等女学校に一本化された

表3から分かるように、中等学校令公布の前までに開校した実科高等女学校15校は、すべて高等女学校に昇格している。

3) 教育課程にみる家庭（保育）関連科目

初めに高等女学校と実科高等女学校の教育課程を比較する。浦和高等女学校の教育課程⁸⁾と久喜実科高等女学校の教育課程⁹⁾をそれぞれの高校の100周年記念誌、70周年記念誌を基に作成した。表4に示すとおりである。

表4 高等女学校と実科高等女学校の教育課程（大正8年ころ）

| 学校名 | 学年 | 修身 | 国語 | 歴史地理 | 数学 | 理科 | 理科及び家事 | 家事 | 裁縫 | 図画 | 音楽 | 唱歌 | 体操 | 実業 | 教育 | 法制及び経済 | 英語 | 週間授業数 |
|--------|----|----|----|------|----|----|--------|----|----|----|----|----|----|----|----|--------|----|-------|
| 浦和高女 | 1年 | 2 | 6 | 3 | 3 | 2 | | | 5 | 1 | 2 | | 3 | | | | 3 | 30 |
| | 2年 | 2 | 6 | 3 | 3 | 2 | | | 5 | 1 | 2 | | 3 | | | | 3 | 30 |
| | 3年 | 2 | 6 | 2 | 3 | 3 | | | 6 | 1 | 1 | | 3 | | | | 3 | 30 |
| | 4年 | 1 | 5 | 2 | 2 | 3 | | 2 | 5 | 1 | 1 | | 3 | | | 2 | 3 | 30 |
| | 5年 | 1 | 4 | 2 | 2 | 3 | | 4 | 6 | | | | 3 | | 2 | | 3 | 30 |
| 久喜実科高女 | 1年 | 2 | 6 | 3 | 2 | | 2 | | 12 | 1 | | 1 | 3 | | | | | 32 |
| | 2年 | 2 | 6 | 3 | 2 | | 2 | | 12 | 1 | | 1 | 3 | | | | | 32 |
| | 3年 | 2 | 5 | | 2 | | 4 | | 14 | 1 | | 1 | 3 | 2 | | | | 34 |
| | 4年 | 2 | 5 | 1 | 2 | | 3 | | 14 | 1 | | 1 | 3 | 2 | | | | 34 |

久喜実科高等女学校は大正8年（1919）に開校し、その2年後には県立の高等女学校に昇格するが、その間の2年間は実科高等女学校の教育課程であり、従来からの高等女学校であった浦和高等女学校との違いが顕著である。

主な特徴は、実科高等女学校には、高等女学校における①「英語」がない。②「音楽」が「唱歌」になっている。③「実業」がある。高等女学校の④「理科」と「家事」は「理科及び家事」の統合になっている。そして⑤「裁縫」がほぼ倍の時間数になっ

ていることである。

これらから実科高等女学校では家政を重視していたことがわかる。実科高等女学校に比べ普通科目の多かった高等女学校ではあるが、当時の男子校の中学校と比較¹⁰⁾すると「国語」や「英語」、「歴史地理」や「理科」「数学」の主要科目が少なく、「家事」「裁縫」「音楽」等の芸能科目が多いことがわかる。このようなことから高等女学校にしる実科高等女学校にしる、いわゆる良妻賢母を育成していた教育機関であり、学力を重視した男子の中学校とは異なる性格を有していた。

次に家庭系に関する課程は表5に示すとおりである。高等女学校も実科高等女学校も履修年度は異なるものの、育児や衛生を学んでおり良妻賢母への道を歩んでいる。

表5 高等女学校と実科高等女学校の家庭系授業内容

| | | 浦和高等女学校 | | 久喜実科高等女学校 |
|------|------|---------|--------------------|-----------------------|
| 学年 | 科目 | 理科 | 家事 | 理科及家事 |
| 第一学年 | 毎週時数 | 2 | | 2 |
| | 課程 | | | |
| 第二学年 | 毎週時数 | 2 | | 2 |
| | 課程 | | | 生理及衛生 |
| 第三学年 | 毎週時数 | 3 | | 4 |
| | 課程 | 生理衛生 化学 | | 化学・物理・家内の整理・飲食物の調理・実習 |
| 第四学年 | 毎週時数 | 3 | 2 | 3 |
| | 課程 | | 衣食住に関する理論及び実習 | 物理・育児養老看護・家事・経済・実習 |
| 第五学年 | 毎週時数 | 3 | 2 | |
| | 課程 | | 飲食物、養老、育児、家事、経済、実習 | |

さらに、昭和18年(1943)には中等学校令が公布され、高等女学校及び実科高等女学校は中等学校という括りになった。長年地域の要望に応じて実用科目を教授してきた実科高等女学校は、高等女学校に組織替えになり、その教育内容も大きく変更された。所沢高等女学校の旧職員である齊藤克¹¹⁾は、思い出の記で「長い間、実科女学校で被服、調理、育児等の実用知識、実技を地域の要望に即して教育し、喜ばれていたが、戦時中の改革で高等女学校に換わり、理数科等にも多くの時間をさくようになった・・・」と述べている。地方都市での充実した女子教育の一端と改革による戸惑いを垣間見ることができる。

この昭和18年の変更により、学科課程が細部にわたって整備され、基本学科は「国民科」「理数科」「家政科」「体操科」「芸能科」の5つ、増課教科は「家

政科」「外国語科」の2つとした。基本学科「家政科」の課程は、家政・育児・保健・被服の4課程とし、この領域は生徒にとって必履修となった。

昭和18年以降の教育課程は表6に示すとおりである。育児、家政、保健と現在の保育に関わってくる内容になっている。

表6 高等女学校の学科課程

| 学年 | 科目 | 基本教科 | | | | | 修練 | |
|------|------|------|----------|-------------|----------|----------|----|-------------|
| | | 家政科 | | 国民科 | 理数科 | 体操科 | | 芸能科 |
| | | 家政 | 育児 保健 被服 | 修身 国語 歴史 地理 | 数学 物理 生物 | 体操 武道 教練 | | 音楽 書道 図画 工作 |
| 第一学年 | 毎週時数 | 2 | 4 | | | | 3 | |
| | 課程 | 家政 | 被服 | | | | | |
| 第二学年 | 毎週時数 | 2 | 4 | | | | 3 | |
| | 課程 | 家政 | 被服 | | | | | |
| 第三学年 | 毎週時数 | 2 | 4 | 4 | | | 3 | |
| | 課程 | 育児 | 保健 | 被服 | | | | |
| 第四学年 | 毎週時数 | 1 | 2 | 4 | | | 3 | |
| | 課程 | 育児 | 保健 | 被服 | | | | |

Ⅲ.戦時下の高等女学校と保育の関連

1) 高等小学校附設幼稚園(託児所)との交流

現存する高等学校の創立周年記念誌や市町村史を見ると、高等女学校が高等小学校(後年は国民学校)と併設されていることが多く、さらに小学校に幼稚園や保育所が附設されていることがわかる。そこにおいては、高等女学校生徒と幼稚園(保育所)児との多くの交流や実習が行われていた。具体的な例を挙げて見る。加須実科高等女学校では、経営方針¹²⁾で学校経営の方針を9本挙げており、その中の1つ「幼児保育ノ実習ヲ課すること」中で、「幼児保育上衛生方面ノコトハ家事科ニ於テ、知育徳育方面ノコトハ教育科ニ於テ特ニ留意シテ之ヲ取扱フ、小学校附設ノ託児所幼稚園ニ於テ實際保育ニ従事セシメ、学習事項ノ実施練習ヲ行フ」とあり、小学校附設の託児所、幼稚園で実際に保育に従事し、学習の実施練習を行わせていた。いわゆる保育実習を実施していたのである。

松山実科高等女学校では、大正15年(1926)4月に、松山第一尋常高等小学校々内新校舎に於いて実科高等女学校として開校したが、昭和6年(1931)度の運動会から、高等小学校と附設の幼稚園児たちも参加¹³⁾している。深谷実科高等女学校の70周年記念誌¹⁴⁾には、昭和14年(1939)卒業生の思い出に、「実科高等女学校は小学校に同居、

幼稚園が附設してあった。体育館も講堂もなかったの、卒業式は幼稚園の園舎で行った」と回想している。多くの高等女学校が開校当時は、小学校に附設してあった幼稚園と実習や交流を図っていたことが窺える。

2) 昭和前期の農繁期託児所

農繁期託児所の設置について、穴戸健夫¹⁵⁾らは、農繁期託児所の設置と展開について述べている。その概要は次のとおりである、農村生活が厳しいなか、繁忙期に手不足な家庭の乳幼児を預かって保育し、母親やその他の家族の労働能力を高め、生活の向上を図ろうとしたものである。明治23年(1890)に鳥取県美穂村で「下味野子供預り所」開所した。これが農繁期託児所の最初と言われている。その後農繁期託児所の数は増えず、昭和元年(1926)でも全国で138カ所しかなかった。ところが農業問題が深刻になると、地主と小作人との階級対立を緩和し農業の生産性を向上させるため、託児所の設置が奨励され、昭和5年(1930)に2,519カ所、昭和15年(1940)には22,758を数えるにまでになった。

穴戸らは農繁期託児所の増加を当時の思想面で分析し、当初の施設増加の伸び悩みは、託児所経営者の多くは、農村の乳幼児を保育するということに目的を置くよりは、農民を恩恵的に救うことを目的とする方が強く、託児所の内容が農民の育児感や生活とかけ離れていたからだと分析している。設置数が伸びなかった農繁期託児所であったが、やがて政策的な面や戦時体制に入ってから男手の少なくなった農村における女子の労働力確保の理由により、飛躍的に増設されていった。

埼玉県では、埼玉県保育史¹⁶⁾によると、昭和3年(1928)の利島村(現加須市麦倉)農繁期託児所開設が農繁期託児所の初見であり、昭和17年(1942)まで各地区での開設の記録が見られる。昭和19年(1944)以降は疎開保育所の開設が見られ、農繁期託児所は出現していない。疎開保育所は東京の学童疎開を受け入れて開設した保育所であり、昭和5年(1930)5月に農繁期託児所を開設した永光寺(深谷市)¹⁷⁾は、昭和18年(1943)に学童疎開を受け入れなければならないことになり、やむなく閉ざすこととなった。この永光寺の農繁期託児所について、保母であった永島芳枝¹⁸⁾は、「農繁託児所を父の永島孝照(永光寺住職)が

始めたのは昭和5年のことでございます。オルガンを弾いているのが私で、当時東京の小石川にありました師範学校の附属の保母科を卒業したばかりで、十八歳でございました。小学校の先生もお手伝いに来てくださいました。」と回顧しており、昭和6年(1931)当時、屋外でオルガンを弾く永島さんを、30人程度の子どもが輪になって囲み遊戯をしている様子を見ることができる。

高等女学校の授業で、家事・育児を学んでいた女子生徒ではあったが、昭和元年(1926)から昭和6年(1931)までの農繁期託児所の文献を見る限りでは、関係する記載を見いだすことはできなかった。

3) 女子生徒の勤労奉仕場所としての農繁託児所

昭和7年(1932)から昭和20年(1945)までは、満州事変の勃発から日中戦争、そして太平洋戦争と進んでいく準戦時体制から戦時体制の期間である。この期間、国策により多くの女子学生は勤労奉仕、勤労働員として軍需工場や学校工場、農村での勤労を強いられた。国や埼玉県の法令や通知を基に勤労奉仕や勤労働員の様子をまとめたものは表7に示すとおりである。

昭和12年(1937)7月に勃発した日華事変の後には、出征兵士による人手不足や農耕馬の軍馬供出により農村の生産力は落ちた。それ克服するための食糧増産計画と挙国一致や尽忠報国、堅忍持久を柱とし、国民生活の物心両面における必要性を説いた国民精神総動員運動によって、女学校の生徒は農村への勤労奉仕に出かけるようになった。

並行して農繁期には小学校も休みになり、多くの農繁期託児所が開設され、勤労奉仕として高等女学校の生徒も手伝った。昭和16年(1941)6月、忍町(現行田市)は、町内の7カ所に田植え期の託児所を開設した。写真は、行田市の長久寺の長老、井桁浄継氏が所有する農繁期託児所の写真である。幼児・児童が集団で輪になっている写真は、長久寺境内での一コマであり、セーラー服の忍高等女学校生の姿が写っている。また、長久寺農繁保育所の看板を前にした写真は、氏が4歳当時の写真であり、私服の女子は忍高等女学校の生徒と推測される。当時、農繁期の休校は国民学校のみで高等女学校はなかった。この写真は学校が休みだった日曜日に手伝いに行ったとき撮影されたのではないだろうか。また、長久寺の末寺である成

表7 高等女学校関連勤労奉仕及び勤労働員

| 年 月 | 主な事項 国及び埼玉県の通知 | 内 容 |
|----------------|-------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------|
| 昭和6年9月(1931) | 満州事変勃発 | |
| 昭和12年7月(1937) | 日華事変勃発 | この年、応召兵士遺家族への勤労奉仕開始 |
| 昭和13年6月(1938) | 文部省) 集团的勤労作業運動実施に関する件 | 夏季休業中の集团的勤労奉仕(農事・家事・清掃・修理・土木及び防空施設や軍用品に関する簡易な作業) 低学年3日、その他は4日 |
| 昭和14年3月(1939) | 文部省) 集団勤労作業実施に関する件 | 集団勤労作業を夏・冬に限らず随時実施。正業に準じて取り扱うことを指示。木炭増産、飼料資源の開発、食糧増産等。この頃学校に自発的な報国団が結成 |
| 昭和16年2月(1941) | 文部省) 青少年学徒食糧飼料等増産運動実施要項 | 食料増産運動で食糧の確保を目指す。年間30日以内の勤労奉仕を授業として認める |
| 昭和16年8月(1941) | 文部省) 学校報国隊組織に関する訓令 | 学校報国隊を結成し、勤労奉仕に従事 |
| 昭和16年12月(1941) | 太平洋戦争開戦 | |
| 昭和17年5月(1942) | 埼玉県学務部長→国民学校長・女子青年団長) 農繁期労力奉仕二週スル件 | 農繁期の労力奉仕、保育所並びに共同炊事の開設と運営にあたること。保育所運営の留意事項を明記 |
| 昭和17年5月(1943) | 埼玉県経済部長・学務部長→中等学校長・国民学校長) 昭和17年度青少年学徒の勤労働員に関する件 | 青少年学徒の農村勤労働員の強化 |
| 昭和17年7月(1942) | 埼玉県知事→各学校長) 埼玉県教育実践指針 | 銃後奉公として、勤労働奉仕、食糧増産に協力外をあげる |
| 昭和18年6月(1943) | 学徒戦時動員体制確立要綱 埼玉県内政部長→各学校長) 学徒戦時動員体制確立要綱実施に関する件(7月23日) | 勤労働員の強化。中等学校以上の学校は、工場地域・農村地域に簡易または季節的幼稚園・保育所及び共同炊事場を設置し、運営し保育に従事 |
| 昭和19年1月(1944) | 緊急学徒勤労働員方策要綱(閣議決定) | 勤労働員の強化。工場への動員、学校工場への動員。概ね1年のうち4か月 |
| 昭和19年3月(1944) | 決戦非常措置要綱ニ基く学徒動員実施要綱(閣議決定) | 勤労働員の強化。中等学校は概ね1年 |
| 昭和19年8月(1944) | 学徒勤労働令 | 国家総動員法に基づき、学校報国隊ほかを整備、勤労働員は概ね1年 |
| 昭和20年3月(1945) | 決戦教育措置要綱(閣議決定) 埼玉県内政部長→各中等学校長外) 決戦教育措置要綱に関する件 | 4月1日から翌年3月31日まで授業停止。通年勤労働員 |
| 昭和20年5月(1945) | 戦時教育令 | 決戦教育措置要綱の法制化。学徒を、食糧増産、軍需生産、防空防衛、重要研究等の業務に就かせる。学校ごとに教職員と生徒によって学徒隊を組織 |
| 昭和20年8月(1945) | 終戦 | |



長久寺農繁期託児所

成就院農繁託児所

を入れていたことがわかる。そのほかの高等女学校で保育所関係が明確に分かるのを挙げてみる。児玉高等女学校²⁰⁾が「三・四年生は二年生の頃より麦刈り、草刈り、蚕上げ、託児所手伝い、学校農場の作業と教育課程による正常な授業はほとんど受けなかった。……」、次に越ヶ谷高等女学校²¹⁾が沿革史で、昭和17年(1942)6月3日「本日より18日まで、3・4年生数名宛分団を作り農繁期の農繁託児、炊事等勤労奉仕に出動する。」とある。翌年の昭和18年(1943)6月15日には、「本日より10日間農繁期託児、炊事の勤労奉仕のため3・4年生交代で出動する。」とある。また、本庄高等女学校²²⁾では、昭和14年(1939)に実施した夏季休業において、「3. 奉仕作業として託児所手伝い」を挙げている。川口高等女学校²³⁾では、昭和18年5月17日「本校生保母として出勤」の記録があるとともに、「埼玉県教育実践指針 川口高等女学校生徒指導要項」の第六、銃後奉公、1. 勤労奉仕作業中のハに農繁期託児所への手伝いがある。埼玉県教育実践指針は昭和17年(1942)7月に各学校に示されたものなので、川口高等女学校の生徒指導要項はそれ以降に制定されたものである。他の学校も農繁期に勤労奉仕に出動しているので、託児所手伝いが行われたのかもしれないが、本研究では以上の高等女学校での実施等が明らかになったのみである。

4) 高等女学校に附設する託児所・幼稚園

昭和18年(1943)6月25日、大東亜戦争(太平洋戦争)の現状に対応するため、学徒の教育錬成内容の一環として戦時動員体制を確立し、学徒の有事即応の態勢を整えるとともに、勤労働員を強化し、戦力増強を図る目的で「学徒戦時動員体制確立要綱」²⁴⁾を閣議決定した。埼玉県では、同年7月23日付けで内政部長から各学校宛に依命通牒している。要綱中「2. 勤労働員の強化」において、「(9) 女子ニ在リテハ、前各項ニ依ルニ外、特ニ中等学校以上ノ学校ニ付、工場地域・農

就院の写真にもセーラー服姿の忍高等女学校生徒が写っている。これは課業日だと思われる。

昭和16年(1941)の農繁託児所の様子について、2年後の昭和18年(1943)6月に発刊された埼玉教育¹⁹⁾に「農繁期に於ける我等の学校」の題で県立忍高等女学校が執筆している。その中で本年度の努力事項の一つに保育所奉仕を挙げ、「家政科の家事は保育と関係が深いが、今年は未だそこまで進んで居らないので、差し当たり、四年生の育児実習として生徒通学町内に約二十カ所開設する予定である。保育実習については去る昭和十六年六月中約八日間の実習にて概ね成果の見るべきものを得たので、本年度は更に此の方面の施設を充実したい。……」この後、保育所運営の指針等も記載されており、保育所奉仕(保育所実習)に力



長久寺農繁期託児所 長久寺長老 井桁 浄継 様 所有

村等二簡易又ハ季節的幼稚園・保育所及び共同炊事場ヲ設置セシメ、又ハ他の経営スル斯種施設ニ於テ保育等ニ従事セシム」とあり、高等女学校に幼稚園・保育所を設置することが奨励された。昭和18年（1943）は中等学校令が公布され、高等女学校規程が改正された教育改革の年であった。基本課程の教科の一つに「家政科」が定められ、家政・育児・保健・被服が科目となった。規程の第五条に「家政科ハ我が国ノ家ノ本義ヲ明ニシ皇国女子ノ任務ヲ自覚セシムルト共ニ家庭ニ於ケル実務ヲ習得セシメ勤勞ノ習慣ヲ養ヒ主婦タリ母タルノ徳操ヲ涵養スルヲ以テ要旨トス」とあり、皇国女子の任務を自覚させるとともに、家庭に於ける実務を習得させ主婦であり母であることの徳操を涵養することを目指した。高等女学校の生徒は、以前から家事や育児について学び実習も行ってきた。更に農繁期託児所や共同炊事場での勤勞奉仕も体験してきたところではあるが、改めて戦時体制下の女子生徒のあり方及び将来の女性像を見据えての改訂であった。この時期、高等女学校が幼稚園または保育園を有していたのは、表8に示すとおりである。

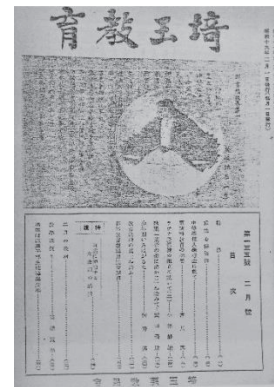
川口女子高等女学校については、創立五十年誌及び創立70年記念誌に、保育所を設置の記載があるが詳細は見いだすことができなかった。浦和第一高等女学校²⁵⁾については、幼稚園設立の趣旨や施設設備の状況、園児募集の様子、保育の内容等が詳細に残されている。創立の趣旨は昭和18年（1943）の教育改革と翌19年2月に閣議決定した決戦非常措置要綱に基づいて、重点事項である保育に最も効果的な方法として、学校内に常設機関として幼稚園を設置したとある。また、非常時の女性の職場進出や主婦・母親も戦時体制下で勤勞に励む状況の時、母親に代わりその負担や不安を取り除くため幼稚園を設置するのも目的の一つで

表8 高等女学校が開設した幼稚園・保育園

| 学校名 | 開設日 | 内 容 等 |
|-------------|----------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 川口高等女学校 | 昭和18年（1943）12月1日 | 保育所設置（50年誌・70年誌） 詳細不明 校舎1階の隅の教室で幼稚園が開設されていた。（座談会） |
| 県立浦和第一高等女学校 | 昭和19年（1944）5月1日 | 幼稚園設置 33名入園 保育実習は秋から4年生がクラス別に10名程度ずつ来園。 保育内容は、唱歌・手技・遊戯・外遊び・積み木・絵本読みなど （百周年記念誌・幼稚園四十年） |
| 県立久喜高等女学校 | 昭和18年（1943）5月3日 *生徒戦時動員体制確立要綱が閣議決定される前に設置 | 保育所設置 オルガン、すべり台、低い鉄棒等設置。 「家政科」で保育、4年生全員が「家政週間」という独自の時間割で授業を受けた（七十周年誌） |

ある、とも述べている。運営は報国団（従来の学友会。教職員と生徒との組織）が行い、施設設備は「9坪の保育室」「18坪の遊戯室」「幼児用机、椅子」「下駄箱」「ベビーオルガン」「大火鉢」「幼年クラブ30冊」が主なものであった。保育日誌が現存しており、絵本やレコード鑑賞、唱歌の内容が見られる。

次に久喜高等女学校について述べる。久喜高等女学校の保育所については、創立七十周年記念誌²⁶⁾に、設立の経緯や施設設備、入所式の様子等が簡単に記載されている。またグラビアには園庭で遊ぶ園児と高等女学校の写真が掲載されている。これは保育所に関する唯一の写真とのことだが、現在の久喜高校には存在していない。また、保育に関係すると思われる「家庭週間」の記載もあるがその詳細は不明であった。今回の研究で、幸いにも戦前の教育雑誌である埼玉教育²⁷⁾に「新要目



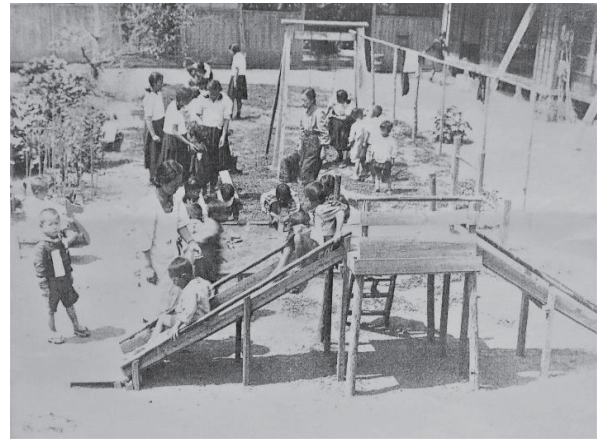
の精神に基く我が校 家庭科教育の概要 —幼児保育所の新設と家政週間制の実施—」との題で、学校長である宮川 武先生が寄稿されているものを発見した。戦後70年で初見なので、詳細を報告したい。

開所して7か月経過した時期の発表であり、教生（高女生）の感想も挙げられており保育実習の苦勞が窺える。始めに設立の経緯であるが、女子中等学校の学科改正で家政科教育に重きを置くようになった。1・2年次の家政の扱い、また育児をどのように扱うか困難な問題として捉えていたところ、創立20周年事業の余剰金もあったことから、家事科の割烹教室制作予定を変更して、保育所新設に至った。設備は「スベリ台、ブランコ、シーソー、砂場、下駄箱、傘置、机、腰掛け、その他」、備品は「レコード、蓄音機、木琴、積み木（白木・色付）、カルタ、絵合わせ、塗り絵帳、自由画

帳, 折り紙, 黒板, 整理用引き出し, 整理用戸棚, その他, 幼稚園遊戯の保育要諦「子供の舞踊(曲譜集・動画集), 年中行事歌の本, 折紙童話は「折紙と切紙, 折紙と手工, 手工のお手本, 手工の友, 略画の友」等, 充実した内容になっている。保育実習は5月から6月に行うが, その種目は, 手技(折紙)は「富士山, 座布団, 船, 飛行機, 風船, 兜, 兎, コップ等23, 紙芝居は教生が制作するが「キューピーさん, 猫の日傘, 良い子の一日, 夕焼け小焼け, お日様, 鼠の知恵等20, レコードは「夕焼け小焼け, オスベリ台, かぜひき子狐, 数え歌, 狸ばやし等17, 唱歌遊戯は「朝帰りの歌, 金魚の昼寝, 兎の芋掘り, あの子は誰, お月様等13, 遊びは「自由遊び, 猫と鼠, 手拭い落し, 積木, 影踏み等11, 童謡は「一寸法師, 牛若丸, つくしんぼう等9, 図書「日の丸の旗, お山, チューリップ, 鯉のぼり等7」と充実した内容になっている。園児は数え年5歳以上とし, 預かり時間は午前9時半から午後1時までであった。保育料は徴収しないが, 昼食の副食物費と手技材料費は月1円50銭を定額で徴収した。以上の外, 埼玉教育には教生の感想よりの摘出事項として, 幼児の実習指導を通して(1)体験した点(はなし), (2)困難に思われた点, (3)改善すべき点が記載されており, (1)では①保母の仕事の容易ならぬこと, 見かけでは楽な仕事に憧れぬこと。②幼い時から正しいことを教えることの重要性。③独立心を起こさせる必要ほか。(2)では子供が泣いたときの扱い方。②依頼心の強い子の扱い。③団体行動の時, そろわず, 他人の真似をして列が乱れる時ほか(3)では①友達同士仲良くさせる。②自分のことは自分でさせる。③口答えする子への注意ほか挙げられており, 困難や悩み等は, 今日行われている本学学生の幼稚園実習, 保育所実習に相通じるものがある。次に「家庭週間」であるが, これは第4学年の家政科の授業を実習を含めて効率よく実施するために, 久喜高等女学校が特別に編制した時間割である。クラスの時間割を3種類作成し, 第1週, 第2週, 第3週と異なった授業展開を行う。その中である1週は, 家政週間として3週間分の家政科授業を行う。1日の時間割は, 午前中第1限より第4限まで主に家政科を専修し, 午後を他教科を履修する仕組みになっている。学習内容は週35時間授業のうち8時間を家政科以外の科目, 27

時間を家政科時数とし, そのうち7時間は家事理論と反省会, 残り20時間は家政班(被服・割烹), 保育班(保育実習), 給食班(団体炊事)に分かれてそれぞれ20時間の授業を受ける。このことにより, 各生徒は保育実習約2週間(40時間), 団体炊飯も2週間(40時間), 家政班は160時間学習し得ることになる。以上の事柄が埼玉教育に掲載されている。

また, 久喜高校に現存しない保育所の写真が,



アサヒグラフ 1943.6.9より転載 耳蔵Ⅱビジュアル

アサヒグラフ昭和18年(1943)6月9日号に掲載されているので転載する。すべり台やブランコ, 鉄棒, 砂場等, 整った設備が見られる。

この時期, すべての高等女学校は工場への勤労働員や学校内工場に勤労働員されていた。このような中で, 保育所を運営していた高等女学校の苦勞は並大抵のことではなかったと推測する。

今回, 高等女学校に附設する幼稚園・保育園は川口, 浦和第一, 久喜の各高等女学校であった。川口高等女学校は不明だが, 他の2校は, 戦時体制下の国策に応じての開設であったことが分かった。また, 今回の研究では詳細をつかめなかったが, 加須高等女学校のように終戦時まで小学校に隣接していた学校は, 同じく小学校に附設あるいは隣接していた幼稚園・保育所と実習等で連携をしていたと推測する。今後の研究課題としたい。

IV 終わりに

本研究を通して, 戦前の高等女学校は戦後の教育改革を経て男女共学校に姿を変えたものもあるが, その大多数が現存していることが分かった。戦前同様に現在も女子高校であるのは6校のみである。高等女学校は良妻賢母の育成を目指した女

子中等学校であったが、すべての生徒が家事・育児を学んでいた。これは高等女学校設置の目的が、「女子ニ須要ナル技芸専修を与えるため」だったことに始まる。準戦時体制に入っていくに従い、女子生徒は、農村不況や食糧増産の政策により農村へ勤労奉仕に出かけた。また農繁期託児所が増加するに従い、託児所手伝いという勤労奉仕にも従事した。やがて本格的な戦時体制に突入すると、学業を停止して農村支援や工場への勤労働員、学校工場での勤労へと動員されていった。この状況でも農繁期託児所への勤労奉仕は続いた。科目「育児」の実習という側面もあったと思われる。

昭和18年（1943）に閣議決定された学徒戦時動員体制確立要綱で高等学校に幼稚園や保育園を設置することが推奨されたが、実際には3つの高等女学校に設置されたのが確認できた。浦和第一高等女学校や久喜高等女学校は、高等女学校規程制定に伴う新しいカリキュラムのもとで、幼稚園または保育所での実習や手伝い等を行い、保育との関わりは一層強くなっていった。

戦前の女子中等教育は良妻賢母の育成であったが、この教育の影響は、戦後にも影響を与え、男女の価値観の違いや家庭観や職業観等にも影響を及ぼした。近年、女子の地位向上や社会進出、男女共同参画、男子の育児休暇取得など、社会の価値観や生活様式も変わりつつある。「子育ては女性が無償でやるもの」という戦前から続いた意識も、ようやく解消されつつある。高等女学校の生徒は、現在の学校制度では、中学1年生から高校2年生に該当する。昭和初期に女子しか学ばなかった育児や家事は、現在では中学校及び高校において男女共修、必修科目となっている。家庭科は戦後男女の選択科目、女子の必修科目を経て、平成5年（1993）に中学校で、平成6年（1994）に高校で男女の必修科が実施された。男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てることを家庭科の目標としている。ようやく戦前の良妻賢母主義から脱却したのである。

少子化が危惧されている今日、家庭保育及び集団保育の重要性は益々大きくなっていくであろう。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、御指導・御助言を賜り、また貴重な資料を御貸与いただきました、埼玉県

立進修館高等学校長水野浩様、埼玉県立久喜高等学校様、埼玉県立図書館様、埼玉県立総合教育センター様、行田市郷土博物館様、長久寺長老井桁浄継様を始め、多くの方々にお礼を申し上げます。

引用文献・注釈

- 1) 埼玉近代史研究会. 埼玉近代百年史（下巻）. 須原屋. 1974,10. p.121 - 124
- 2) 木村泰男. 太平洋戦争期教育公文書収録. 埼玉県図書館協会. 1973,11. p. 87 - 90
- 3) 湯川嘉津美. 「戦時下高等女学校における保育実習とその指導」. 上智大学教育学論集. 2013,3. p.44 - 49
- 4) 文部科学省. 学制100年史委員会. 高等女学校令の公布. 2009以前, www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317627.htm
- 5) 埼玉県立浦和第一高等学校創立百周年記念事業実行委員会. 百年誌「ゆかりとともに」. 株式会社さきたま出版会. 2000.11. p.38 - 39
- 6) 新井淑子. 高等女学校の研究. 大空社. 1994.1. p.30 - 31
- 7) 埼玉県教育委員会, 「埼玉県教育史 第5巻」, 1972,3. p. 327 - 329
- 8) 埼玉県立浦和第一高等学校創立百周年記念事業実行委員会. 百年誌「ゆかりとともに」. 株式会社さきたま出版会. 2000.11. p.492 - 493
- 9) 埼玉県立久喜高等学校創立七十周年記念事業実施委員会. 埼玉県立久喜高等学校創立七十周年記念誌「紫草」. 1992,6. p.38
- 10) 埼玉県教育委員会. 「埼玉県教育史 第5巻」 1972,3, p. 332
- 11) 所沢高校百周年記念誌編集委員会. 所沢高校百周年記念誌. 1999,5. p. 792 - 793
- 12) 加須市. 「加須市史 資料編Ⅱ 近現」. 1983,3. p.554 - 556
- 13) 埼玉県立松山女子高等学校. 「七十周年記念誌」. 1995, 11. p.76 - 77
- 14) 埼玉県立深谷第一高等学校. 「七十周年記念誌」, 1978, 10. p.179 - 180
- 15) 穴戸健夫他. 保育の歴史. 青木書店. 1981,4. p.55 - 56
- 16) 埼玉県保育協議会. 埼玉県保育史. 1982,3.

- p.286－288
- 17) 埼玉県保育協議会. 埼玉県保育史. 1982,3.
p.35－36
 - 18) 深谷郷土文化保存会,写真集「深谷市の昭和史」,
1993,11,p.34－35
 - 19) 埼玉県教学会. 埼玉教育第127号. 1943.6. p.60
－62
 - 20) 埼玉県立児玉高等学校. 創立七十周年記念誌.
1993,11. p.195
 - 21) 埼玉県立越ヶ谷高等学校. 創立六十周年記念
誌. 1985,5. p.314
 - 22) 埼玉県立本庄高等学校. 埼玉県立本庄高等学
校五十年史. 1972,10. p. 89
 - 23) 川口市立川口女子高等学校. 川口市立川口女
子高等学校五十年誌. 1979,11. p.51, 176
－177
 - 24) 木村泰男. 太平洋戦争期教育公文書収録. 埼
玉県図書館協会.1973,11. p. 87－90
 - 25) 埼玉県立浦和第一女子高等学校附属幼稚園.
埼玉県立浦和第一女子高等学校附属幼稚園創
立四十周年記念誌. p.13－16
 - 26) 埼玉県立久喜高等学校. 埼玉県立久喜高等学
校創立七十周年記念誌.1992,6. p.118－119
 - 27) 埼玉県教学会. 埼玉教育. 第135号, 1944,2. p.8
－14